

他者との調和と個性の尊重

山梨英和高等学校 2年生

「リーダーシップを正しく使えるように成長して欲しい。」小学校一年生の初めての家庭訪問で、当時私の担任だった先生が母にこう伝えたそうだ。私はそれまで自分にリーダーシップがあると思ったこともなければ、自分に与えられた能力を正しく使うということについても考えたことがなかった。この時はまだこの言葉が何を意味するのかを掴めなかったが、この言葉にはどこか重みがあり、心に残っていた。次にこの言葉を思い出すきっかけとなったのは、大勢で遊んでいた時の年上の友人に対する私の態度を母に叱られたことだった。気がつけば場を仕切っていることが多かった私はその時も率先して遊びを進行していたのだが、無意識のうちにその友人に命令口調で話していたらしい。

「いくら仲が良くても年上の人にその口調はないでしょう。」

と母に指摘され、はじめは私の年上の人との関わり方に間違いがあったのだと考えた。しかし普段の自分の行動を振り返った時、根本的な問題はそれではなく、リーダーシップの発揮の仕方を間違えていたことにあったことがわかった。

数年後、ある別の友人と話をしていた時のことだった。彼女は自身との友人関係について黙々と考え込み、全てを否定的に捉えているようだった。そこで、一人で考え込まずその友人に思いを打ち明けてみるのはどうかと提案した。すると彼女はそうのようにするといい、晴れ晴れとした様子で帰って行った。後日彼女に話を聞いてみると、自分の思ったことを何でも言うように心がけているのだが、どうも友人とうまくいかないのだと言っていた。

リーダーシップなどの能力や気質、自分の感じ方、考え方、これら全てのものは人がそれぞれ持つ個性だと言うことができる。しかし、仮に地球上に人が一人だけいたとしたら、これらのものを個性と呼んだらどうか。まず、その状況下では自分について深く考える必要がないかもしれない。自分とは違う他者の存在を意識して、初めて自分という概念が確立する。つまり、他者の存在があってこそ個性なのである。そしてそれぞれが個性を持っているからこそ、補い合い、助け合い、協力し合って社会が成り立っている。最近「私には個性がない。」と悩んでいる人も多く見かけるが、人は存在だけで十二分に個性的な存在だと私は思う。誰一人として全く同じ人はいない。個性豊かな存在だ。

私たちは個性を尊重されていると感じることで幸福感を覚える。それは自身の性格や考え方、在り方、存在そのものが認められ、大切に思われていると感じるからであり、常にそのように感じたいと思うのが私たちの本能である。個性を否定することはその人自身をも否定することになりかねない。確かに個性は尊重されるべきものである。では、個性の尊重とは具体的に何を意味するだろうか。先ほどの二つの出来事を例に考えたい。「リーダーシップ」を振り回して、まるで独裁者のような主導権を握って遊んでいた時の私の行動は、個性を尊重したものであつたらうか。また「自分の考え」や「自分の感情」など、心の内を全て相手に話すことは個性を尊重することだと言えるだろうか。ここでもう一度確認した

い。そもそも個性とは、他者の存在のもとに認識されるものである。二つの例で、自分の個性が尊重されていると感じた人がいたとすれば、どちらもその行動を行なった人だろう。個性そのものは他者なしには認識されないのに、個性を尊重するためには他者の存在を考慮する必要はないのだろうか。

一般にメディアなどで見聞きする「個性の尊重」を訴える声には大きく分けて二種類あると思う。一つは「私の個性を認めてほしい。」という声。もう一つの声は「自分と違う個性を持つ人を受け入れよう。」というもの。前者のように自分の個性を尊重しようとすることは大切なことだ。自分の個性、アイデンティティが不確かであったり、それをないがしろにしたりすることは良いことではない。しかし、他者を意識せず自分の個性だけを尊重すると、それは間違った方向に向かってしまう。

自分の個性を自らの行動を通して尊重したいと思う時、それと同時に他者の個性を尊重したり他者と協調したりすることはほとんど不可能に近い。先に述べた通りに、人は誰でも自分の個性が、自分という存在そのものが認められることを願っている。自分のことを理解してほしい、尊重してほしい、と願っている。ある意味とてつもなく自己中心的な心の塊を持って生きているのだ。そのような私たちが集まっているこの世界で、他者との調和など実現可能なのだろうか。

私たちはそれを、とても簡単な一つの方法によって実現することができる。それは、他者の個性を尊重することだ。他者の存在そのものを認めている、理解しようとしている、大切に思っているのだということ、相手にわかるような行動で示すことだ。今も世界では武力行使の有無に関わらず争いが絶えないが、以前聞いたこの言葉が心に残っている。「十秒もあればこの世界を変えることができる。世界中の全ての人が、自分自身を振り返り、変われば良い。」変わるというのは、家族との関係が悪かったのであればそれを改善しようと思うこと、嫌いな人がいたのであればその人を大切に思うこと、自分が一番になりたいと思っていたのなら他者を尊重しようとするを指すだろう。

自分を犠牲にしながらか他者を尊重し、他者との調和を図らなくてはならないのかと思う人がいるかもしれない。他者を尊重すればいつか自分に返ってくると言いたいところだが、必ずしもそうとは限らない。むしろ期待通りの反応が返ってこないことの方が多いだろう。他者を尊重することを犠牲と捉えるかどうかは、その人が自分自身を受け入れ、大切にできているかどうかにかかっている。高校生の今の時期は、自分のアイデンティティを確立する時期だとよく言われる。実際は、自分は何者なのか、何のために生きるのか、多くの問いの答えを見出そうとして、ただ苦しくなるだけの日々かもしれない。これから向かっていくであろう社会、作り上げていくであろう家庭はまだ鮮明には見えない。その一歩前の今の学校生活、家族との生活の中で、今の私にもできる形で個性の尊重と他者との調和を実現していきたい。そして、その輪を拓げるために力を添えられる人になりたいと思う。